保育における園庭環境の役割
-附属幼稚園での自然体験遊びを通して-

磯部　香[1)]，中島　優佳[2)]，川俣　美砂子[3)]
1）高知大学人文社会科学系教育学部門
2）湖陵幼稚園
3）高知大学人文社会科学系教育学部門

The role of Playground Environments in Early Childhood
—Focusing on Children's Natural Experience in Kindergarten—

ISOBE Kaori[1)], NAKASHIMA Yuka[2)], KAWAMATA Misako [3)]
1)Kochi University Faculty of Education,
2) Koryo Kindergarten,
3) Kochi University, Faculty of Education

要　約

本研究では，幼児たちの庭園での「自然体験遊び」を観察することで保育における園庭環境の役割について明らかにする。本調査場所，日時は，高知大学教育学部附属幼稚園にて 2018 年から 10 月 1 日から 11 月 21 日にわたり外遊びが実施された 11 日間である。調査方法については，幼児たちが草花，虫等の園庭の自然を使用し遊びを創り出している様子を参与観察する手法を取り，参与観察の記録を分析した。記録を分析した結果，幼児たちが園庭の自然から遊びを創り出す過程で，植物や生物とのふれあいのみならず，植物を用いた「ごっこ遊び」の中で，幼児各々が集団の中ですべき役割をおのずと獲得していること，季節や天候の影響を強く受ける植物の生り方や落ち方を観察しながら，幼児同士で植物の生態について情報交換していること，園庭にいる生物を絵本で得た知識と連結させながら観察していること，そして園庭での自然体験遊びを創り上げる一連の過程が，幼児同士，幼児と保育者の関係性構築の一端となっていることが明らかとなった。

キーワード：環境，園庭，自然体験遊び，幼稚園

1. 目的

ここ近年，特に幼児を取り巻く環境は，急速に変化を遂げている。

平成 29 年 3 月に告示された『幼稚園指導要領』の「第 1 章総則　第 1 幼稚園教育の基本」を見ると，

(7) 自然との関わり・生命尊重
自然に触れて感動する体験を通して，自然の変化などを感じ取り，好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら，身近な事象への関心が高まるとともに，自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また，身近な動植物に心を動かされる中で，生命の不思議さや尊さに気付き，身近な動植物への接し方を考え，命あるものとしていたわり，大切にする気持ちをもって関わるようになる。

とあるように，自然環境に触れることで自然の変化や愛情，畏敬の念，さらに動植物の生命の尊重する気持ちを育めることが重要であることが分かる。

さらに「環境」領域の「2　ねらい」の 12 項目には自然や季節，動植物の屋外での活動にて環境への理解を深めることを意図した内容となっている。

(1) 自然に触れて生活し，その大きさ，美しさ，不思議さなどに気付く。
(2) 生活の中で，様々な物に触れ，その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
(4) 自然などの身近な事象に関心をもち，取り入れて遊ぶ。
(5) 身近な動植物に親しみをもって接し，生命の尊さに気付き，いたわったり，大切にしたりする。
(6) 日常生活の中で，我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
(7) 身近な物を大切にする。
(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり，自分なりに比べたり，関連付けたりしながら考えたり，試したりして工夫して遊ぶ。
(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。
(筆者下線)

無論「環境」という語彙は，多くの意味付与がなされている抽象的な多義語であるが，このねらいを読むと，屋内外での活動にも応用できるようになっていること，また屋外の自然環境に重きを置いた内容となっている。

高山静子は『環境更生の理論と実践－保育の専門性に基づいて－』(2015) の中で，環境を構成する要素として①自然，②物，③人，④色，⑤色以外の視覚刺激，⑥音，⑦空間，⑧動線，⑨時間，⑩気温・湿度・空気の質を挙げており，保育者はこの 10 要素を把握した上で園外活動を考えるべきであり，さらに上記の要素以外に，量と質も考慮しながら活動できることが「環境構成の専門性の一つ」(32 頁) であると言及している。

屋外の活動（遊び）に関しては，多くの研究者が指摘している。佐藤晶子（2020）は，戸外遊びと幼児の運動能力の関連があること，そして幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型こども園保育・教育要領の「健康」領域にも戸外遊びの推進が明記されていることから，徐々に少なくなりつつある幼児たちの戸外での遊びの意義を唱えている。

また赤木敏之（2010）は，幼稚園教諭へのアンケート調査から，外遊びが重要であることは，多くの園が認識しているものの，1 週間のうち，外遊びを行っているのが，3 歳児 9.8%，4 歳児 3.9%，5 歳児 2.1%であったことを指摘している。さらに外遊びが重要度と外遊びの時間は相関があることも明らかにしている。

戸外遊びの中でも園庭環境の重要性については，野中壽子（2019）が，社会環境の変容に伴い園庭が減少，縮小している現状と，子どもの身体活動量の連関性を取り上げ，

> 園庭は，保育の中で保育者が子どもの育ちを考えて環境設定を行い，またその環境を保育の展開によって様々に変えられる可塑性のある場である。また，屋外と屋内を，テラスなどの中間的な場を挟んで日常的に行き来できる環境は，子どもの興味・感心に沿った活動を展開していく上で重要で，園外の公園では代替できない機能であると考える。(77・78 頁)

と，園庭でしかできない遊び，園庭の役割の重要性を説いている。

つまり，現下，保育における自然を感じる外遊び，そして園庭での遊びを見直す時期に来ていると言える。自然と触れ合い，自然を体験しながら遊ぶ機会が減少した今だからこそ，従前の自然体験遊びとは一線を画した，現代の自然環境に適合した新たな外遊び，園庭遊びが模索・検討されているのである。

そこで本研究においては，外遊びの中でも園庭での遊びに焦点を当てて，園庭での幼児たちの自然体験遊びを分析したいと考える。園庭が比較的広く，自然が豊かな高知大学教育学部附属幼稚園における園庭での幼児の自然体験遊び，そして遊びの創造を事例として，現代の保育における園庭環境の果たす役割，及び重要性について明らかにしたい。

2. 方法

分析方法に関しては以下の通りである。

・分析視点：幼児が園庭での外遊びを行う場所を中心に参与観察を実施し，その後，幼児たちの自然体験遊びを記録に残した。その記録から園庭の役割及び，重要性に

ついて明らかにしたい。

・調査目的：幼児たちが自由遊びの時間にて行っている自然体験遊びを観察することで，園庭環境の役割，重要性について明らかにし，検討を行う。

・調査場所：高知大学教育学部附属幼稚園の園庭で行わせていただいた。高知大学教育学部附属幼稚園の園庭について高知大学教育学部附属幼稚園の HP[1] を参照して説明を行うと，

> 本園の敷地は 7,847.23 ㎡と全国の附属幼稚園でもトップクラスの広さです。そのため園庭には植物や小動物，昆虫などが多く存在する自然豊かな環境となっています。限られた日に体験する自然ではなく，毎日の園生活の中での積み重ねを大切にしています。・・（中略）・・園庭の草花は，入園当初の子ども達にとっては摘んだり，持ったりすることで心を和ませるものですが，園生活にすっかり慣れた子ども達にとっては自分達の遊びにいかすものでしょう。また，同じ自然物でも 3 歳児にとっては，手に持ったり，集めたりすることが楽しい育ちにありますが，5 歳児になるとじっくり見たり，遊びにいかしたり，飼育したりすることにまで興味が広がっていきます。
>
> このように入園から卒園までの長期の見通しをもって，その時期の子ども達の育ちや，興味関心，教師の願いなどをふまえて，細やかな援助をしつつ，自然を保育に取り入れることを大切にしています。
>
> （筆者下線）

幼児たちが日々，自然環境に触れることを念頭においた園庭づくりとなっており，自然によって幼児たちの気づきやそれに付随する「育ち」を大切にしていることが分かる。そのため，写真 1 にあるような遊具や花壇，山もあるが，それだけではない。

また，図 1 の高知大学教育学部附属幼稚園の地図をみても，園庭が広大であることが分かる。園の四方は木々に囲まれており，樹木を含めた多くの植物が植えられている。それだけでなく自生している植物もある。多様な植物が存在していることで，小さな生物も多く生息し，植物と生物が共生している，非常に豊かな自然環境が設けられている。また，高知大学教育学部附属幼稚園の園庭は，管理が行き届いている空間と，管理が行き届いていないように見せている，ある意味，自然のままの空間が混在しているのも特徴であると言える。

写真 1．花壇・遊具・山（撮影，中島）

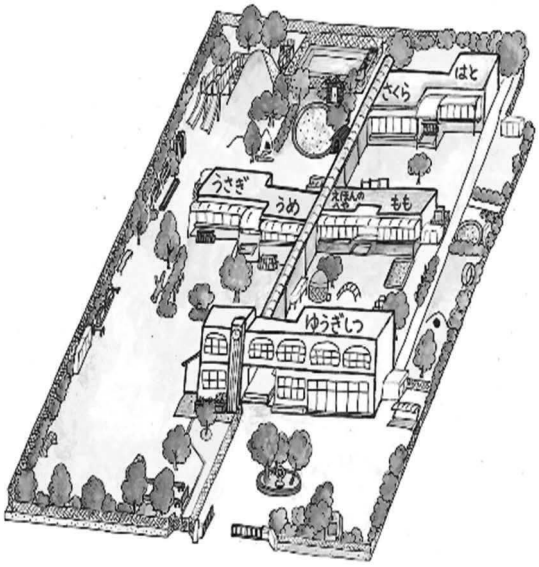

図 1　高知大学教育学部附属幼稚園の地図[2]

・調査対象者：高知大学教育学部附属幼稚園に在籍する幼児たち（年少・年中・年長児）すべてを対象とした。

・調査方法：参与観察の手法を取った。自由遊びが行われる時間に，園庭にて遊んでいるグループや個人を見つけ，幼児たちが草木花や虫の植物・生物といった自然の事物を通して遊びを創造し共有している場面をビデオ録画しながら，参与観察を行った。参与観察時には，幼児たちが創り出す遊びには極力介入せず，幼児たちの遊びを観察するという姿勢を取ったため，観察をする位置や距離に配慮した。調査後，その参与観察の幼児の様子を記録として文字起こしを行った。

・調査期間：2018 年 10 月 1 日～11 月 21 日の合計 11 日間である。（下記の参与観察日表時を参照のこと。）観察日時に関しては，附属幼稚園の行事等を考慮し，事前に日程調整を行った結果，表 1 の日時に決定した。また，

雨天の場合は園庭での外遊びが行われないことから，雨天の日は観察を行わなかった。

表 1. 参与観察日時表

	観察日	観察時間
1日目	2018年10月1日（月）	9:00～11:37
2日目	2018年10月3日（水）	9:00～11:00
3日目	2018年10月9日（火）	9:00～11:10
4日目	2018年10月15日（月）	9:00～11:10
5日目	2018年10月16日（火）	9:00～11:15
6日目	2018年10月25日（木）	9:00～11:00
7日目	2018年10月29日（月）	9:00～10:50
8日目	2018年11月1日（水）	9:00～11:00
9日目	2018年11月14日（水）	9:00～11:00
10日目	2018年11月15日（木）	9:00～11:00
11日目	2018年11月21日（水）	9:00～10:00

注：中島優佳作成の「観察実施日程」を磯部香が改作成。

・調査・分析等の分担：共同研究者である，中島優佳が高知大学教育学部附属幼稚園に実際赴き，参与観察を行い，記録や写真撮影を行った[3]。中島優佳が調査した参与観察記録を使用し，磯部香・川俣美美砂子が，本論の問題関心・目的のもと，新たに分析を行った。

・調査・研究倫理：この参与観察を行うに際し，中島優佳は，高知大学教育学部附属幼稚園より調査の承諾を得ている。調査を実施するに際し，附属幼稚園の厳密な規則に則り，幼児たちのプライバシーを最優先した上で，本参与観察を行っていることも追記しておく。また，本論文で掲載している写真に関しても，附属幼稚園の撮影許可を得て撮影している。

3. 結果

表 2 を参照すると，幼児たちが園庭に植物に興味を持ち，主に植物から遊びを作り出していることが分かる。特に観察時期が 10・11 月であったこともあり，秋の植物に大変興味を持っている。幼児たちは，「イチョウの葉」，「どんぐり」，「楠の実」，「ピラカンサの実」を収集し，それを食べ物や食器に見立て，「ごっこ遊び」をしている記録が多く見受けられる。

次に，生物に関しては，「青虫」や「毛虫」，「コオロギ」，「カマキリ」等の小さい虫が登場する。幼児たちは，虫を捕まえ，図鑑で名前を調べたり，虫が何を主食としているかを保育者に問いかけたりもしており，虫に対しても好奇心旺盛であることが分かる。

「その他」の 2 件に関して説明すると，10 月 1 日の 1 件は，土を掘る土遊びであり，10 月 15 日の 1 件は，砂場での川遊びを行っている。川遊びにおいては，葉っぱで舟を作成しているため，「植物」にも 1 件とカウントした。

表 2. 幼児たちの動植物との自然遊び

	観察日	植物	生物	その他
1日目	2018年10月1日（月）	4	3	1
2日目	2018年10月3日（水）	7	2	0
3日目	2018年10月9日（火）	3	5	0
4日目	2018年10月15日（月）	6	1	1
5日目	2018年10月16日（火）	10	0	0
6日目	2018年10月25日（木）	4	3	0
7日目	2018年10月29日（月）	4	1	0
8日目	2018年11月1日（水）	4	1	0
9日目	2018年11月14日（水）	5	0	0
10日目	2018年11月15日（木）	4	1	0
11日目	2018年11月21日（水）	1	1	0
	合計	52	18	2

注：中島優佳作成の表「抽出エピソード数」を磯部香が一部改訂し作成。

次節では，自然体験遊びの事例を見ていくことにする。

(1) 木の枝を串や箸に見立てて「バーベキューごっこ」遊び

年中児たちは，庭園にあるタイヤを使用して，椅子や敷物，金網を用意し，木の枝や葉っパを使用して「バーベキューごっこ」遊びを行った。中島優佳の 10 月 3 日（水）の記録[4]を引用すると，

> タイヤの上に金網を置き，椅子や敷物を用意し，バーベキューごっこを始めようとしている。幼児は，木の枝を拾ってきて金網の下に入れ，焚火のように見立てる。幼児それぞれが草やイチョウの葉，落ち葉などを拾ってきては金網の上に置く。するとサッカーをしていた男児がやってきて「おお，いいじゃん。」とバーベキューごっこをしている男児に声を掛ける。「何これ，火？肉は？」等とバーベキューごっこに興味を持つ。すると，サッカーボールを持っている男児は近くに落ちていた木の枝を拾って，「はい，これウインナー刺すやつ。」と木の枝を友達に渡す。木の枝を受け取った男児は，枝に茶色の葉を刺し，金網の上に置く。その他の幼児は，金網の上に置く材料を探したり，薪として金網の下に入れる枝を拾

ってきたりと，バーベキューに必要な材料を手分けして集める。1 人の男児は木の枝を探しに行って，それを同じ長さに折ることで，箸を作り，嬉しそうに箸を持ってみる。しばらくして，材料を探しに行っていた数人の幼児と保育者が,「こんなやつ見つけた。」「ブロッコリー見つけた。」などと言って帰ってきて，集めた木の実や植物を金網に乗せる。「私６個だった？」などと言い，取ってきた木の実の数を数える。その場にいた男児のうちの一人は，出来上がっていくバーベキューセットを見ながら「もっと木の枝を持ってこようか。」などと言い，再び材料を集めに行く。すると，保育者と一緒に材料を探しに行っていた男児が，木の枝に葉っぱを何枚も刺したものを持って帰ってくる。バーベキューの様子を見た保育者は,「これ何？」と金網の上の植物を指さして聞く。幼児は嬉しそうに「ブロッコリー。」と答え，盛り上がる。幼児は保育者に木の枝で作った箸を渡して，味見をしてもらう。それをきっかけに，バーベキューセットの周りに幼児が集まり，バーベキューを囲んで食事を始める。金網の上には，木の実や草，木の枝に刺さった葉っぱ，石等，様々なものが乗せられている。（筆者下線）

写真 2.　園庭のタイヤ（撮影，中島）

バーベキューの火を葉っぱに見立て，網の上には肉や野菜が置かれて行っている。またそこにいた幼児が，バーベキューに必要な材料をおのずから手分けして探し，箸に見立てた枝や，ブロッコリーに見立てた葉っぱを使用して，野外にてみんなで食べるという「共食」の様子を「バーベキューごっこ」遊びから模倣している。

(2) 絵本『はらぺこあおむし』の内容を追体験する

10 月 15 日（月）11 時 5 分から年少児たちが，青虫を見つけた。その青虫は，ただ青虫として捉えているのにとどまらないところが興味深い。見つけた青虫を絵本「はらぺこあおむし」と関連付けながら，その青虫を観察しているのである。

木の実を集めている途中で,A 君が青虫を見つける。A 君は「はらぺこあおむし。」と言って観察者[5]に青虫を見せる。すると，それに気付いた他の男児がやって来て，「お腹空いてるみたい。葉っぱ。葉っぱ。葉っぱをあげなきゃいけない。」と言うと，それを聞いた A 君が足元に落ちている葉っぱを見つけて，「葉っぱ。」と青虫を葉っぱに近付ける。しかし，青虫が葉っぱに乗ろうとしないことが分かると，青虫を手に持って近くの友だちに青虫を見せに行く。・・（中略）・・保育者に見せる，すると周りにいた幼児も一緒に青虫を覗き込む。（筆者下線）

と，絵本の『はらぺこあおむし』を想起させる，ある幼児の発言から発展し,「(あおむしは)お腹がすいている」，また青虫は葉っぱを食べるため，葉っぱを食べさせねばならないという絵本の世界や絵本で得た情報を幼児たちで共有しているのである。

写真 3. 園庭にあるログハウス（撮影，中島）

(3) 川をつくり，葉っぱの舟と泡の触感

10 月 15 日（9 時 48 分）から，年中児が，砂場に川をつくり，舟をつくって遊ぶようになる。

砂場ではすでに男児 3 人が，大きな川を作って，そこで木の実や葉っぱを流して遊んでいる。・・（中

略)・・すると女児１人が，川の下流に溜まっている泡に気付き，「すごい。」と言う。保育者は「すごいでしょ。」と答え，男児１人は「これさ，泡，見て。めっちゃ柔らかいで。」と女児に教える。保育者が「これ浮かせてみてもいい？」と泡の上に木の実を乗せると，女児４人が保育者の周りに集まってきて，「私もやりたい。」と一緒に木の実を乗せていく。勢いよく木の実を落として，泡の下に沈んでしまう様子を見て「そっとやらんと。」と言い合って泡の上に木の実が乗るようにそっと乗せるようにする。また，保育者が泡を手に取って，女児に「触ってごらん。」と言うと，女児は最初は触りたくない，と手を背中に回していたが，保育者が泡を差し出すと，そっと泡に触れて泡の感触を感じる。すると，それをきっかけに泡に浮かんでいる泡に手を伸ばして自分から触るようになる。一方で川の上流では，男児がホースで水を流し始める。それを見た女児は，「葉っぱのお舟作らない？」と言い，保育者と女児４人で，船にできそうな落ち葉を探す。葉っぱを見つけられた女児から，川の上流に葉っぱを浮かべる。なかなか進まない葉っぱが進むように，手で波を作ったりして，「行った。」等と友達や保育者と喜び合う。女児の一人が，うまく進んでいく葉っぱの上に木の実を乗せてみると，それを見た他の幼児も同じように葉っぱに木の実を乗せて遊び始める。さらに下流の方にいた男児が，大量に出来上がっている泡に気付き，「見て。」と大きな声を出すと，その場にいた幼児が集まる。泡の上に幼児が木の実を乗せると，「ムースの出来上がり。美味しそうよ。」と保育者が言い，幼児も「ほんとだ。」と触って感触を確かめたり，ムースのような泡を見て楽しそうにする。・・以下省略。（筆者下線）

上記より，水と砂を利用した川作りが発端となり，泡が発生しその泡を触る，泡の上に木の実をのせる，葉っぱで舟をつくり，川に流すという遊びにまで発展している。また川に泡が発生したことにより，幼児たちが多く集まり，保育者と幼児たちが共に川遊びを協同で創り上げている。この遊びで着目すべきは，ある女児が発生した泡を怖くて触れずにいたが，保育者のはたらきかけによって，勇気をもって泡を触ることで，その触感に慣れてたこと，さらにその泡の感触をそこにいる幼児たちが共有していることにある。さらに保育者の泡を「ムース」と例えた表現で，幼児たちもその泡のやわらかさが「ムース」と類似していること，。「ムース」がどのような触感なのかを，体験から習得している点も興味深い。

写真 4.　植物の実（撮影，中島）

(4) イチョウの葉から色彩・デザインを考える

次に，年中児が，葉っぱを使用して花束をつくるという遊びの中で，葉の色彩やデザインをおのずから考えている。

男児が，イチョウの木の下に落ちているイチョウの葉っぱを保育者と一緒に集めている。集め終わると，「お部屋に入ろうか。」と保育室に向かう。男児は保育室で，イチョウの葉っぱの束にセロハンテープを張り，花束のようにして外に出てくる。男児は「きれいでしょ。葉っぱを付けたの。」と嬉しそうに保育者に見せて回る。するとそれを見た女児がやって来て，「きれい。」と興味を持つ。保育者が「どこで見つけたのか(女児に)教えちゃりや。」と男児に言い，男児と女児はイチョウの木に向かう。イチョウの木の下に着くと，「この黄色の葉っぱとか青い葉っぱを合わせて，そしたらこんなんができるよ。そしたら，お部屋に入ってセロハンテープでとめる。」と，女児に作り方を教える。（筆者下線）（10月29日（月）9時52分）

とあり，男児と女児が花束づくりを共に行うことで，葉の色を鑑みながら，花束のデザインを考える契機となっており，色彩やデザインを植物の色やかたちから考えているのである。

写真 5. 園庭にある多くの樹木（撮影，中島）

(5) どんぐりの観察で，どんぐりの色が変化していることに気づく

年少児がどんぐりを集めていた時に，どんぐりの色の色の変化に気づく記述がある。

> 男児 2 人がどんぐりを集めている。2 人は集めた木の実を友だちに分けてあげた後，自分のポケットにしまう。また 1 人の男児がどんぐりを割り，友だちと一緒にどんぐりの中を見て「実！実！」と楽しそうにする。その後，その男児は割ったどんぐりを持って観察者のもとにやって来て，「なんかさ，前チーズみたいやったのに違う。茶色。」と，前回どんぐりを割って中を見た時と比べて，色が違っていることに気付く。（筆者下線）（10 月 16 日（火）11：12）

どんぐりの実を割り，その実の色を観察して，以前の色の違いに気づいている。どんぐりが成長し，どのように色かたちが変化していくのかを，他の食材に例えながら，理解している。

4. 考察

以上，幼児たちの園庭を活用した自然体験遊びを観察することで，以下の 3 点が明らかとなった。

1．幼児たちは，園庭の植物や生物とのふれあい，そして，それらを観察し，触ることによって，植物や生物の変化について理解している。

2．園庭の自然遊びは，決してそこで完結するもではなく，例えば以前に読んだ絵本の内容や過去の体験と連結する。以前に習得した情報を応用させながら，自然と関わろうとしている。

3．自然体験遊びは，「ごっこ遊び」，「みなし遊び」に展開し，その「ごっこ遊び」，「みなし遊び」は，他者やコミュニティとの関係性をはかり，自己の役割認知を促進する装置となる。そして，幼児同士，幼児たちと保育者の関係性構築の一助を担っている。その関係性とは，自己の属するコミュニティの仲間と協同すること，仲間とうまく関係性を構築したい，みんなで一緒に楽しみを共有したいという，情緒的・親密的な要素も多く含まれている。

分析結果をまとめた上記の 3 点は，決して外遊びや園庭環境のみで構築されるものではない。また幼稚園の保育のみで完結するものでもない。幼児たちの生活，そして幼児の生活の中に存在する，前掲の高山静子（2015）が論究した環境を構成する 10 要素が，複合的に連結しながらつくり上げられていることも言及せねばなるまい。

今回の調査分析で分かったのは，屋内の遊びのみでは習得しえない，自然の，人間のコントロールが効かない，未加工の「もの」を加工して遊びを創り出す過程は，身体活動量も促進させるであろうし，さらには幼児たちの心身の発達に大いに寄与しているということである。

園庭の役割は，自然環境に触れる機会や運動する機会，五感を研ぎ澄ます機会，得た情報を追体験する機会を与えるだけでなく，自然の「もの」を通して，他者との距離をはかりながら，他者との体験を共有することで，関係性を構築するための重要なツールとなっているということも明らかとなった。

最後に今後の課題として，以下の 2 点あげたい。

1 点目，本調査の対象場所（空間）を園庭に限定した点である。今回の調査では，園庭の自然体験遊びのみの観察に終始してしまった。今回明らかになったように，屋内・屋外の遊びは断絶しているわけではなく連続しているため，屋内外の遊びの連続性に着目し観察することは重要であると考える。屋内の遊びも観察し，屋内遊びと屋外遊びがどのように連続しているのか，そのプロセスを明らかにしたい。

2 点目，今回の調査が 1 か所の園にとどまった点である。今回調査に協力いただいた高知大学教育学部附属幼稚園の園庭は，他に比べ広く自然体験遊びがしやすい環境であったことを鑑みれば，他の幼稚園の園庭の自然環境や，幼児の外遊びについても調査，分析する必要があると考える。他園の園庭環境や外遊びと比較検討することで，幼児たちの自然体験遊びを通して得られる心身の発達や，他者との関係性の構築についても深く明らかにできると考えている。

謝辞

本論文執筆に際し，調査ご協力いただいた，高知大学教育学部附属幼稚園の教職員の方々には，この場をお借りして心より感謝申し上げます。また本論文にある高知大学教育学部附属幼稚園 HP の一部の引用，及び園庭の写真に関しては，高知大学教育学部附属幼稚園副園長中山美香先生から掲載許可を頂いていることもここに明記しておく。

注

1) 高知大学教育学部附属幼稚園 HP (https://www.kochi-u.ac.jp/kinder/index.html) より引用。

2) 前掲，高知大学教育学部附属幼稚園 HP (https://www.kochi-u.ac.jp/kinder/index.html) より抜粋。

3) 中島優佳が自ら分析した結果については，高知大学教育学部学校教育養成課程　平成 30 年度 卒業論文「幼稚園での自由遊びにおける幼児の自然体験の実態」としてまとめている。

4) 以下，引用する記録は，中島優佳が作成したものを磯部が，本研究の目的に合わせ，適宜，記録の省略及び，文章に下線を引く作業を行っている。

5) 観察者とは，中島優佳を指す。

引用文献

赤木敏之 (2010)：幼稚園の外遊びの実態と幼稚園教諭の外遊びの意識，聖和論集，38，pp. 1-9.

佐藤晶子 (2020)：実習生が捉えた保育現場における戸外遊びの実施状況，駒沢女子短期大学研究紀要，53，pp. 27-31.

高山静子 (2015)『環境更生の理論と実践－保育の専門性に基づいて－』エイデル研究所，pp. 32-36.

野中壽子 (2019)：保育所における園庭環境が幼児の身体発達に与える影響，名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究，第 31 号，pp. 77-84.

文部科学省 (2017)『幼稚園教育指導要領』(平成 29 年 3 月告示)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf　(閲覧日：2020 年 11 月 22 日)

高知大学教育学部附属幼稚園 HP
https://www.kochi-u.ac.jp/kinder/index.html (閲覧日：2020 年 11 月 20 日)